提言

「出会い、ふれあい、わかりあいの35年」

くまもと障害者労働センター（通称おれんじ村）を立ち上げたのは1985年4月でした。障害当事者が3人で自立生活を始めた事がきっかけです。労働センターを立ち上げる3年前に重度障害当事者が一人で自立生活をしながら水俣の無農薬栽培の甘夏を販売していたことがおれんじ村の名前の由来です。

くまもと障害者労働センター（以降：センター）設立当初は、粉石けんや無農薬のお茶など環境に良い物を販売していました。

当時はホームヘルパー制度も無かったので、大学や街頭でボランティア募集のチラシを配っていました。私は、その当時、民家のアパートでの一人暮らしをしていました。そこにボランティアの人に来てもらい支援をしてもらいながら暮らしをしていました。その頃50人くらいのボランティアの人に出会うことが出来ましたが、その後ホームヘルパー制度が出来、ボランティアの人との出会いが少なくなりました。

くまもと障害者労働センター
代表 倉田 哲也 さん

またその頃、障害者自身が街へ出ていくことが少なかったので、買い物や食事のために街へ出ていくことは障害者の存在を示すことになると思っていました。そこでお店の人に手伝ってもらうことでふれあいが出来ていました。1970年後半から（そよ風のように街に出よう）のスローガンで障害当事者が地域の中に出ていく運動が行われていました。

最初はセンターでの仕事が少なかったので、生活介助（入浴介助、食事介助など）もしていました。その後、牛乳パック回収及び整理作業も仕事になり、グリーンコープ生協の環境委員会と福祉委員会の人たちと一緒に作業をすることになり、地域の人たちとの繋がりが出来てきました。

私は、1995年ごろより小学校などに講演に行き始めていました。最初は子どもたちから注目されることが嫌な時もありましたが、話をしていくうちに子どもたちの目が変わってきました。それは出会いが障害者としての見方を変える事になったからだと思います。自分たちの生活を話す中で、できることとできないことを伝えることで子どもたちは、自分たちと同じだと思うようになってくれます。

子どもたちと一緒に給食を食べたりするともっと距離が近づきました。先生たちの反応も子どもたちに似ていました。

子どもたちへの話の中で、「自分に限界を作っていませんか」と投げかけます。そして、「どうせ…」という言葉を使っていませんかといいます。それを「せっかく…」という言葉に変えることで前向きな考えになっていきますよと伝えています。これには子どもたちも大きくうなずいたり、終わりの感想でこの言葉が一番印象に残ったと語ってくれます。

地域での生活で出会ったたくさんの人たちの応援により、2003年に社会福祉法人を取得して新しい事業を始めました。

①就労支援継続B型事業
②生活支援事業
③相談事業

現在、障害者と健常者と合わせて50名で働いています。現在の具体的な事業は、訪問イベント販売、食品製造・油菓子（サーターアンダーギー）・焼き菓子（かりんとう・クッキー）、ORENGE CAFE運営（お弁当づくりと販売）、人権啓発・交流、IT部（印刷関係・ブログ作成）、熊本市男女参画センター（はあもにい）でのCAFE・まいペーす経営などです。

皆さんご存知ですか？障害者福祉事業でもらえる1カ月の工賃は全国平均1万5千円です。これで利用料や給食代を取っている事業所もあります。残りは半額くらいです。これでは生活ができません。

センターの理念としては、

（37ページに続く）

（38ページ「提言」続き）

障害者も健常者も生活できる所得を保障することを目指しています。センターの仕事の仕方として、その人の特性に応じた仕事をしています。一般的には、生産性を求める余りに見失いがちですが、例えば、封筒に似顔絵を描いたり、お弁当にメッセージを書いて入れることが仕事になっています。絵やメッセージが仕事になる?と思う人もいるかもしれません。その絵やメッセージがお客さんの目に留まり、また繋がりが生まれることがあるのです。

だから、つくる事は出来なくても書いたりすることは出来るので、そのことが仕事として周りからも認められています。

もう一つの理念として継続しているのは、センターの運営はみんなで決めるということです。年間計画や1カ月の目標設定作りなど、月に2回の全体ミーティングをしています。色んな意見が出てなかなか1回で決まることは少ないですが、みんなで話し合ってみんなで決めることが、労働センターの特徴です。

センターも、働くなかまが増え事業内容が増えてきました。そこで今年度新しい作業場をつくりあげます。クリスマスの頃、出来上がる予定です。これからも、くまもと障害者労働センターは、地域の中で共に働き・共に生きていく場所を目指していきます。